

「完全なコミュニケーション」相対化の先へ ——「テレパス」と「天才」をめぐる——

Beyond Relativization of “Perfect Communication” : “a Telepath” and “a Genius”

筒井久美子

TSUTSUI Kumiko

The arguer about communication says that people long for the communication to understand each other perfectly. However, do we really long for the “perfect communication” today? Instead, I suspect that we don’t believe in that communication longer and give up understanding someone or being understood. So, this paper shows what the “perfect communication” is and what that communication brings, by reviewing two science fictions that deal with a telepath or a genius. Then, we will show the new aspect of the understanding, that can bring the crisis and that can release from certain knowledge.

キーワード：コミュニケーション (communication)、理解 (understanding)、秘密 (secret)、知識 (knowledge)

1. 問いの所在

大学のゼミでコミュニケーションについて議論したとき、ある違和を感じた。完全に分かり合うコミュニケーションについて、ある学生は「そのようなコミュニケーションは自分には無理だ」といい、ある学生は「友人同士でもタブーに触れることはない」し、「秘密があることで関係が続く」のだという。従来のコミュニケーション論は、理解をめぐる「完全なコミュニケーション」の存在を信じている人々を前提とし、「完全なコミュニケーション」を批判してきた。しかし、学生同士で議論をしていると、現在ではすでに「完全なコミュニケーション」の虚構性が前提となっており、前提がずれてきているのではないかと考えてしまう。このとき感じた違和は筆者が普段から感じていたものでもある。本稿を始めるにあたり、まずはこの前提のずれについて説明しなければならない。

かつて鶴見俊輔 ([1952] 1991) は、哲学者・菅季治の自死をめぐるエピソードを題材として、コミュニケーションについての論考を書いた。第二次大戦後、旧ソ連に捕虜として抑留されていた人々は、自分たちの帰国が遅れたのは、日本共産党の徳田球一がソ連側に、「反動分子の持ち主は帰すな」と「要請」したからであるとして、真相究明を求める請願を国会へ提出した。ソ連の収容所で、いつ日本へ帰れるのかと質問した日本人捕虜たちに対し、ソ連の政治将校は「日本共産党書記長徳田は、諸君が反動分子としてではなく、よく準備された民主主義者として帰国するように期待している」と述べたというのだ。

このときソ連の将校の通訳を務めたのが菅だった。そのため、彼は国会に証人として招致され、証言を求められることになる。国会において彼自身は、自分は通訳を務めただけであり、「要請」の有無については分からないという主張を続けていたが、質問者たちは菅に「要請があった」と言わせようとする。追い詰められた菅は遂に自死を遂げてしまう。菅は自死する前にしたための文章の中でこう述べていた。「あの事件で、わたしはどんな政治的立場にもかかわらないで、ただ事実を事実として明らかにしようとした。しかし政治の方ではわたしのそんな生き方を許さない。わたしは、ただ一つの事実をさえ守り通しえぬ自分の弱さ、愚かさに絶望して死ぬ」（鶴見 [1952] 1991: 277）。

このエピソードから鶴見は、菅が「ディスコミュニケーション」の問題を軽視していると指摘する。「ディスコミュニケーション」とは、対話における意図的・無意図的なすれ違いの部分、つまり、コミュニケーションにおいて意味の通じ合わない部分のことである。菅は一切のディスコミュニケーションを排除した「完全なコミュニケーション」の可能性を信じ、ディスコミュニケーションに対して無防備であったため、質問者たちとのディスコミュニケーションに傷つけられ、絶望する結果となったのだ。鶴見は次のように言う。

（現実には存在しないところの）理解深い知性とゆたかな感受性をもつ人びとのむれにたいして、自分の心情の完全なコミュニケーションをもつことへの期待がある。ぼんやり、他人に同意をもとめる期待がある。このため、ぼくたちは、しばしば、不当に、他人によりかかるし、よりかかれなきには「絶望する」。（鶴見 [1952] 1991: 285）

私たちは、「完全なコミュニケーション」という現実には存在しないものを求めてしまうという。「完全なコミュニケーション」では自他の「心情」など、ある真理を設定して、この真理の理解を賭けて行われると想定されている。そして、「理解深い知性」と「ゆたかな感受性」によってこの真理を完全に理解する状態が「完全なコミュニケーション」だ。

このような、ないものねだりを指摘し、コミュニケーションを特定の思い込みから自由にしようという論調は鶴見以外にも見られる。例えば、井上俊（2009）は、鶴見の論考を受けて佐野洋子による『シズコさん』に描かれる娘と認知症の母との対話を紹介する。この母と娘はもともと非常に冷たい関係にあったが、認知症になった母と対話を続けた娘は、いつしか「世界が違う様相におだやかになった」と書く。井上はこの事例から、「理性的でも論理的でもない対話によって深いコミュニケーションが成り立つようなこともある」と指摘している。鶴見はディスコミュニケーションを問題として提起したが、井上はさらに進めてディスコミュニケーションが「深いコミュニケーション」を生むこともあると主張するのだ。いずれにしても、両者は人々を「完全なコミュニケーション」の思い込みから解放しようとする方向性を共有している。

しかし、そもそも私たちは「完全なコミュニケーション」の存在を本当に信じているのだろうか。冒頭にあげた学生たちの声を踏まえると、必ずしもそうとは言えないように思う。筆者自身も、信じているのかいないのかわからなくなることがある。「理解深い知性」や「ゆたかな感受性」に憧れる一方で、これらがフィクションであることも既に了解している。むしろこの了解によって、他者は理解できないものだと同もって諦め、他者理解か

ら完全に遠ざかってしまうことがある。逆に、他者から理解されようという努力を完全に放棄してしまうこともある。だが、他者を理解しよう／されようとする営みから降りてしまうことも、「完全なコミュニケーション」に拘泥するのと同様、コミュニケーションの豊かさから降りてしまっているのではないだろうか。

そこで、「理解深い知性」や「ゆたかな感受性」のあるコミュニケーションは神話であり、悲劇を生みかねないことを踏まえつつも、これらがあるコミュニケーションはどのようなものなのか、私たちに何をもたらすのかを、再度、具体的に見定めておこうと思う。井上の論考からは、コミュニケーションには、「理解」を求めるとは異なる相があることが分かる。本稿では、コミュニケーションにおける「理解深い知性」や「ゆたかな感受性」による理解について、そこから降りてしまうのではなく、コミュニケーションの1つの相として位置付け直したいと思う。「完全なコミュニケーション」はありえないが、かといって理解なるものを全く諦めてしまうのでもない、1つの相として、理解を位置づけてみよう。

この問いに接近するために、本稿では作家たちの想像力を借りようと思う。「完全なコミュニケーション」を可能にする「ゆたかな感受性」や「理解深い知性」は現実にはありえないが、作家たちの想像力によってSF小説の中には、「ゆたかな感受性」や「理解深い知性」といった現実にはありえない能力をもった人々が登場するからだ。

本稿では中でも、2つの小説を題材として分析していきたい。1つ目が、筒井康隆による小説『家族八景』(1972)である。主人公の火田七瀬は18歳、物心ついたときから他者の心が読めてしまうテレパスだ。驚異的に「ゆたかな感受性」を持つ七瀬は、高校卒業後、その能力を人に知られないようにするため、家政婦として見知らぬ家族を転々としていた。2つ目は、ダニエル・キイスによる小説『アルジャーノンに花束を』(1966=1989)である。32歳になっても幼児程度の知能であるチャーリー・ゴードンは、最先端の手術を受けることで、IQ185の超天才になる。驚異的に「理解深い知性」を持つ彼は、従来の関係の中で知的軸にそって上昇し、そして下降する。この2つの小説は、「ゆたかな感受性」や「理解深い知性」を持つ者が「完全なコミュニケーション」を実現した場合に何が起こるのかを豊かに描き出しており、この点で、本稿の問いに接近するために適切な題材となる。

七瀬が入り込んだ家族、手術を受けたチャーリーが戻ってきた社会のコミュニケーションはどうなるのか。「ゆたかな感受性」を持つ人、「理解深い知性」を持つ人が現れたら、その場はどうなるのか。次章から小説の紹介と分析を進めていこう。

2. 「ゆたかな感受性」のあるコミュニケーション

小説『家族八景』からテレパスの七瀬のいるコミュニケーションを見て行こう。以降の議論の見通しをよくするために、まずはゲオルク・ジンメル「秘密」についての興味深い議論を援用しておこう。

彼によれば、人は自分のなかで生じたことについて、提示するものとしなないものを選別して提示している。また、人は他者が隠そうとしている「秘密」についてだけではなく、他者が積極的には明らかにしていない「秘密」についても、接近しないよう「配慮」をしている。人の周りには、他者から隠そうとしていることと積極的には明らかにしていない

ことを含めた「観念的な領域」が存在しており、他者がこの領域を侵犯することは「人格価値」の破壊であり、その人の人格に対する「侮辱」、「自我への暴行」なのだ（Simmel 1908=1996: 362-3）。

しかし、彼はいう。「心理学的に敏感な耳を持つ者」はその領域を「心ならずも」侵犯してしまう。人は「心理学的に敏感な耳を持つ者」に対してもっとも秘密にしている思考や性質についても漏らしてしまう。しかも、それらを漏らさぬように守ろうとするがゆえに、漏らしてしまうのだ（Simmel 1908=1996: 364-5）。

テレパスではない人が、言葉以外では表情や声色、振る舞いなどから推測するしかない他者の心の中が、テレパスの七瀬にははっきりと見えてしまう。ジンメル議論を下敷きにすると、テレパスは「心理学的に敏感な耳を持つ」究極の存在だ。人々は自分自身の周りに壁を巡らせて、その外に出して他者へ提示することと、その内に秘めて他者から隠すことを分けている。他者は自己が巡らせた壁の内をある程度まで覗き知ることができるが、建前上は知らないフリをする。しかし、テレパスには、ある自己がいかに壁を巡らせているのか、何を外に置き、何を「秘密」にしているのかが、すべて見えてしまう。また、ある自己が他者の壁や「秘密」をどう見ているのかもすべて見えてしまう。

（1）桐生家——自我への暴力

ではまず、家族の一員との1対1のコミュニケーションから見ていこう。哲学者・菅は自分の心が伝わらないことに絶望して自死を遂げた。しかし、自分の心が伝わってしまうことは必ずしも良い結果をもたらさしはしない。桐生家の事例を見てみよう。

桐生家の主人、桐生勝美から犯されそうになった七瀬は、テレパスの力を使って彼を撃退する。彼の心から読み取った言葉を声に出して返すことで、自分が心を読めることを示し、彼が同居している息子の妻を心の中で犯していたことを声に出して指摘し非難、勝美が心の中で自分を相手にしない妻のせいにするのとそれさえ言い訳だと声に出して否定した。勝美の心は混乱する。

勝美にテレパスであることを知らせてしまった七瀬は、勝美が正気を取り戻したときの自分の身を案じ、やむを得ず、勝美の心を圧殺することにした。既に恐怖のあまり幼児期に退行した勝美が過去に亡くなっている彼の祖母のもとに逃げようとする、七瀬は声を張り上げて祖母は既に死んでいるのだと叫んだ。勝美の心は空白になり、彼は発狂する。

桐生家において七瀬は、勝美による七瀬自身の身体への暴行に対して、勝美の「自我への暴行」で答えた。壁の内側に隠している「秘密」を壁の外側へと次々と取り出して見せるのだ。その「秘密」は、家族に暴露されたら、家族の中の父、夫としてふさわしくない内容である。その結果、「暴行」された勝美の「自我」は崩壊してしまう。

この場面では、菅が夢見た「完全なコミュニケーション」が実現している。しかし、勝美は、正気を保つことができなくなってしまう。もちろん、菅の場合は伝えたいことが伝わらない、勝美の場合は伝えたくないことが伝わってしまうという点で、両者は異なる。しかし、「ゆたかな感受性」のあるコミュニケーションは、それを秘密にしたいか否かという他者の意思にかかわりなく他者の心情をすべて見通し、そればかりか、秘密にしたいか否かという意思まで見通してしまう。菅の場合も、「完全なコミュニケーション」が実現した結果、伝えたいことだけではなく、例えば法廷ではふさわしくないプライベートな事柄

など、伝えたくないことまで伝わってしまうということになり、それは昔にとっても悪夢というべき出来事であるだろう。

(2) 根岸家・高木家——家族の動揺

次に、家族集団の中にテレパスが現れたらどうなるのか、根岸家と高木家の事例を見ていこう。

1) 家族の「秘密」を見る

根岸家の事例から紹介しよう。根岸菊子は若くして大学助教授となった夫の初三と生まれたばかりの子の3人家族であった。夫は研究室の学生と浮気をしており、彼女は驚異的な洞察力によりそのことを知っていた。しかし、菊子には夫を直接責め立てることができなかった。なぜなら、彼女は自分自身を「良妻」と信じており、夫を責め立ててしまうと、自分は「良妻」ではなくなってしまうと考えていたからだ。そのため、心の中で異常なまでの怒りを増殖させていた。「嫉妬心をむき出しにし、夫を詰り、つかみかかり、泣きわめきさえすればもっと楽になれるだろうにと七瀬は思ったが、菊子にそんなことができるわけがないこともまたわかっていた」(筒井 1972: 140)。

高木家の事例は次の通りである。高木家と市川家はいずれも夫婦2人暮らしでマンションの隣同士である。両夫妻は、自分の妻／夫の長所と短所の裏返しを隣の妻／夫に見出し魅かれていることに、七瀬は気が付く。つまり、高木輝夫は市川季子に、高木直子は市川省吾に魅かれており、逆もまたしかりであった。しかし、「今のままでは、いつまでも同じ状態が続く筈だった。四人の男女の良識が無分別な行動を避けようとする筈だった」(筒井 1972: 177)。

七瀬はこの4人の男女の心に火をつけ、組み合わせを替える「実験」を試みることにした。それは、「それぞれの配偶者に縛りつけられたままでいようとする、建前的な貞操観念ぐらいなら、七瀬がほんの少し、自分の能力を活かして手を加えるだけで簡単に崩れそうな気がした」(筒井 1972: 177-8) からであり、「彼女の倫理にとって、正常な人間たちの『願望』と『実行』の間には大きな隔たりを認めることができなかった」(筒井 1972: 178) からである。

根岸菊子も高木夫妻も、それぞれのやりかたで「家族」を続けようとしている。菊子は「良妻」であることによって、高木夫妻は「一夫一婦制」に基づく「貞操観念」によって、そうしている。しかし、七瀬から見れば、「良妻」も「一夫一婦制」や「貞操観念」も、ある思い込みに過ぎず、それらはただの思い込みとして相対化されてしまう。七瀬から見れば「良妻」は端的にそれを辞めれば楽になるものであり、「貞操観念」は「建前的」なものにすぎない。

家族たちと七瀬とで「家族」に対する見方が異なるのは、七瀬が家族たちの心に秘めている「秘密」をすべて読めてしまうからである。菊子については、心の中から決して出そうとはしない「怒り」が読めるからこそ、そうすることで保たれている「良妻」を相対化し、心の中の「怒り」を外へ出してしまえばよいと考えている。高木夫妻（七瀬は市川夫妻と合わせ「2組の男女」と呼ぶ）については、隣家の夫婦と結ばれたいという「願望」が読めてしまうからこそ、それを外に出さないことで保たれている「貞操観念」に基づく

「一夫一婦制」が、「配偶者に縛りつけられたままでいようとする」に過ぎない「建前」的なものに見える。

このように、七瀬は家族のメンバー（七瀬は「家族たち」と呼ぶ）には見えない、家族たちの心の中＝「秘密」が見えており、結果、見えていない家族たちの思い込みに気が付くことができる。七瀬の目を通して家族たちを見る読者は、家族たちの思い込みを相対化していくのである。

では、家族たちはどうだろうか。七瀬が自分の心の中で家族たちの思い込みを相対化しているだけでは、読者は家族を相対化して見るようになるもの、家族たち自身には何も起こらない。しかし、七瀬は自分自身の保身や倫理観に促されて、家族たちの「秘密」を暴露しかねる思い込みを利用しよう、あるいは、かれらを思い込みから解き放とうとする。この瞬間、家族たちの間に「ゆたかな感受性」が顕在化することになる。では、「ゆたかな感受性」が顕在化したとき、家族たちはどうなるのだろうか。

2) 家族の「秘密」を暴露する

こちら根岸家からはじめよう。かつて超心理学の研究をしていた夫の新三は、ふとしたことで七瀬に超能力があるのではないかと疑い彼女に超能力検査を強要した。七瀬は何とか切り抜けたものの、新三のこれ以上の詮索の手が伸びてこないようにして、根岸家を去らなければならないと考える。そこへ帰宅した菊子は、検査を強要されたために七瀬が流していた涙を見て、新三が七瀬にも手を出したのだと誤解し猛烈な怒りに駆られていた。それを察知した七瀬は菊子のこの怒り利用しようと決め、彼女の怒りを最大限に増幅させ彼女を精神的に追い詰めた。そして、誇り高い菊子に対して、夫が浮気相手とともに菊子を馬鹿にするような悪口を言っていたと口にする。このことは、驚異的な洞察力を持って夫の浮気に勘付いていた菊子でさえ、初めて知った出来事だった。「見上げれば紅蓮の炎が赤ん坊を抱いた姿の菊子を包んでいた。炎の中にすっと立った菊子はあの慈悲の笑みを浮かべたまま、眼だけは大きく見開いて七瀬を見おろしていた」（筒井 1975：166）。翌朝、七瀬は根岸家を辞したが、その2日後、菊子は赤ん坊とともに風呂場で自殺する。

七瀬は夫の「秘密」を暴露した。もちろん、驚異的な洞察力を持つ妻は夫の「秘密」をある程度把握してはいたが、七瀬が暴露したには、その妻も把握してない事柄であり、また、誇り高い菊子にとっては、最も我慢できない内容であった。その結果、菊子も自分の「秘密」を壁の内側に秘めておくことができなくなる。菊子は、夫への激しい「怒り」を内面に隠していたが、その怒りは、菊子にとって「良妻」であり続けるためには絶対に暴露してはならない「秘密」だった。しかし、七瀬による夫の「秘密」の暴露によって、菊子の「怒り」は壁の内側に秘めておくことができなほど増大してしまっている。そして、菊子は赤ん坊とともに自殺し、家族は崩壊する。

ここから分かることは、この家族が「秘密」によって成り立っていたということだ。菊子にとって、家族を続けるためには、自分が「良妻」であることが条件であった。しかし、夫の「秘密」の暴露によって、妻の「秘密」も留めきれなくなり、彼女は「良妻」ではいられなくなってしまふ。それまでなんとか保たれてきたバランスが崩れ去ってしまう。

高木家ではどうだろう。七瀬によって心に火をつけられた2組の男女は、それぞれが隣の夫婦とデートをしている最中にホテルのレストランで偶然鉢合わせをしてしまう。結果、

4人はもとの鞘に収まることになった。自宅に戻った高木夫妻は、お互いが市川夫妻とホテルで肉体関係を持ったものと誤解しているが、先に口に出したほうが馬鹿にされてしまうと考え、口に出して確かめることはできない。しかし、寝室で互いの肉体を通して口に出せなかったことを確かめ合い、復讐しあううちに、愛を取り戻したのだった。

七瀬は、夫婦たちの内面に留められた「願望」という「秘密」暴露させようとする。つまり、「願望」を「実行」に移すことで「一夫一婦制」に基づく「貞操観念」を破壊しようとした。

しかし、根岸家のように家族が崩壊することはなかった。七瀬はこの結末を迎えた理由を次のように洞察している。「断ち切れそうになった夫婦の絆を守るためになんでもかんでも、不貞というたがいの過失をさえも性衝動を高めることに利用しようとする中年男女のあがき」(筒井 1972: 197) に七瀬は負けたというのだ。筆者もこの洞察を支持する。高木夫妻は、暴露された「秘密」自体を、家族を継続させる資源にしている。一方の根岸夫妻は、暴露された「秘密」を家族の継続に再利用することができなかった。

とはいえ、根岸家でも高木家でも、家族たちは「良妻」「一夫一婦制」「貞操観念」という思い込みから自由になることはできていない点は共通している。根岸菊子は「良妻」から自由になれなかったため、自殺を選ぶ。高木夫妻は一見、それらの思い込みから自由になったように見える。しかし、市川夫妻と4人家族となるわけではないし、「貞操観念」があるからこそ、「不貞」が「性衝動」を高めることになるのだ。

では、元の問いに戻ろう。「ゆたかな感受性」を持つ人が現れたら、その場はどうなるのだろうか。いずれの家族たちも、七瀬によって自らの思い込み(「良妻」、「一夫一妻制」、「貞操観念」)が揺るがされている。その手口は共通していて、七瀬は家族たちが心の中に秘めている「秘密」の領域を侵犯し、「秘密」を暴露しようとする。結果、七瀬の目を通して家族たちを見ている読者にとって、家族たちが持つ思い込みは相対化される。しかし、『家族八景』において、家族たち自身は思い込みから解放される方向へ進むことはない。菊子は、「良妻」という思い込みから自由になれず自殺し、高木夫妻は「一夫一婦制」や「貞操観念」という思い込みを強化する方向へ進んでいる。

しかし、七瀬によって家族たちにもたらされる帰結は2つの可能性があったのではないか。1つ目は筒井が描いた帰結である。しかし、筆者はもう1つの帰結の可能性があったと考える。根岸家の場合、心の中に留めていた怒りを増幅させることで、「良妻」を破壊し、菊子が思い込みから自由になるという帰結である。高木家の場合、七瀬の予想通り「貞操観念」や「一夫一婦制」が破壊されるという帰結である。このような可能性を示唆するのが、小説『アルジャーノンに花束を』である。

3. 「理解深い知性」のあるコミュニケーション

次に「理解深い知性」のあるコミュニケーションについて、『アルジャーノンに花束を』を題材として検討しよう。32歳のチャーリー・ゴードンは、昼はパン屋で働き、夜はピークマン大学の精薄者センターで勉強する毎日を過ごしていた。そんなある日、彼は知能を上げる手術を受けることになる。ピークマン大学のニーマー教授とストラウス教授による最先端の手術だ。頭が良くなることを切望していたチャーリーは手術やその後の度重なる

検査にも協力的だった。チャーリーのIQは185に達し、手術は成功したかに見えたが、チャーリーは自らに施された手術に欠陥があることに気が付く。本作はチャーリーが手術を受ける直前から、手術を受けたのちに再び知能が低下し自らワレン養護学校へ向かうまでの約8か月の間に彼が書いた経過報告という形式をとっている。

(1) 国際会議前夜祭——異なる地平へ引き出す

チャーリーも七瀬と同様、彼がいる場を相対化してしまう。典型的な場面を紹介しよう。ニーマー教授とストラウス教授は国際会議でチャーリーに施した手術について報告をすることにしていた。会議の前夜祭、ニーマー教授が手術について得意そうに聴衆に説明しているさなか、チャーリーはラハジャマティやタニダの論文によってニーマーの説が論駁されてしまう可能性について質問する。ニーマーはそれには答えず、話を打ち切った。

なぜニーマー教授が狼狽したのか分からないチャーリーは、ストラウス教授をパーティー会場の脇に連れ出して問いただした。そして、ニーマー教授はヒンズー語も日本語も読めないため、出版されたばかりで翻訳のないラハジャマティやタニダの論文を読んでいないことを知る。チャーリーは彼らが自分の専門分野でさえ知り尽くしてはいないことを知って肝をつぶした。そして席を外したがっているストラウス教授をさらに問いただし、彼らが外国語はたった5か国語、古語はラテン語とギリシア語のみしか読めず、物理学や地質学、経済学、数学についてもほとんど無知で、彼の知識がごく限られたものであることを知る。

国際会議における彼らの報告を聞いて、チャーリーは自分自身に施された手術が寄ってたつ理論の欠陥を発見する。科学的手法に乗っ取って欠陥を証明したことにより、ニーマー教授もストラウス教授も彼らの誤りを認めざるを得ない。そして、チャーリー自身は、手術によって獲得した知能を急激に失っていく。

ここでアルフレッド・シュッツの議論を補助線に使用しよう。シュッツは「社会的世界の内にいる行為者」の知識と、「社会学者」の知識が異なるとして次のように説明する。「すなわち、社会学者は、一科学者として、整合性、論理一貫性、分析的帰結といった科学的諸理念に従って、よく整序された用語を使って、できるだけ明晰に社会的世界を考察し、記述し、かつ分類しようと試みるのである」(Schurz 1964=1991: 134)。一方の、「社会的世界の内にいる行為者」の知識は同質的ではない。「(1) 整合性にか、(2) 部分的にしか明晰ではなく、(3) 矛盾から全面的に解放されていない」(Schurz 1964=1991: 136)。

とはいえ、持っている知識が異なるのは、「社会学者」と「社会的世界の内にいる行為者」だけではない。「社会的世界の内にいる行為者」も、所属する集団によって知識が異なっている。そのため、ある集団から別の集団へ移動した「よそ者」は、自分が持っていた知識が絶対でないことを知り、「よそ者」が入り込んだ集団の成員にとって「よそ者」が自分たちの知識を脅かす者として映る (Schurz 1964=1991)。

シュッツの議論を援用すれば、上述の場面において、ニーマー教授やストラウス教授は「社会的世界の内にいる行為者」、超天才のチャーリーは「社会学者」、「よそ者」である。「社会学者」の知識を通して「社会的世界の内にいる行為者」を見ると、後者の知識は歪んだものに見える。チャーリーはそうとは知らずに発言し、ニーマーやストラウスの知識を異なる地平に引き出すことで丸裸にし、その歪みを浮き彫りにしてしまう。

(2) 七瀬とチャーリーの比較から——思い込みからの解放

では「理解深い知性」のあるコミュニケーションとはどのようなものなのか。テレパスの七瀬と比較しながら、検討しよう。

七瀬は、彼女が入り込んだ集団成員のそれぞれが他の成員に対して隠している「秘密」を暴露することで、集団を揺るがしていた。チャーリーはそうではない。むしろ、そのような種類の「秘密」について彼は大変鈍感である。チャーリーの場合は、集団の成員が持つ知識の外側にあるもの、成員全員に隠されている（秘密）を集団の内部に持ちこむことで集団を動揺させている。彼がニーマー教授に提示した論文をニーマー教授は読んでいなかった。また、彼が当然のように習得している言語も学問も、ニーマー教授、ストラウス教授ともに習得してはいない。

テレパスの七瀬は自らの力が他者に知られた場合、身の破滅になることを予感していたため、他者の「秘密」が見えているということを直接提示することは決してない。しかし、チャーリーは七瀬よりも素朴である。自分が他者の（秘密）が見えているという自覚がないため、思わず自分の力を露呈してしまう。そして、人びとを動揺させると同時に、自らも動揺してしまう。上述の場面でも、チャーリーはニーマーやストラウスが、チャーリーと同じ「社会学者」の知識を通して世界を見てると信じていた。しかし、実際の2人の教授は「社会的世界の内にいる行為者」の知識を通して世界を見ており、チャーリーの発言は教授たちを動揺させ、チャーリー自身も動揺してしまう。チャーリーは同じことを、働いていたパン屋でも、恋人との関係においても繰り返してしまう。

しかし、七瀬の力もチャーリーの力も、集団やその成員を脅かすものである。「集団内に生まれ、育てられた成員は誰でも、先祖や教師やその筋の権威者から伝えられる文化の型という規制の標準化された図式を、社会的世界の内で普通に生起するあらゆる状況における疑問視も疑う余地もない案内として受容している」(Schurz 1964=1991: 137-8)。この「文化の型」には「秘密」や〈秘密〉がある。集団の成員には見えない「秘密」や〈秘密〉が見えてしまうことによって集団にとって「よそ者」となる七瀬やチャーリーは、集団に「危機」(Schurz 1964=1991: 139)をもたらしてしまうのだ。

しかし、七瀬が入り込んだ家族において、家族たちは思い込みを揺るがされるものの、決してそこから自由になることはなかった。だが、チャーリーは学界の人びとをその思い込みから解放する。チャーリーに手術が施される前から、手術が成功しない可能性は考慮されていたが、あらゆる可能性を考慮しても成功が見込まれたため、教授陣は人体実験の実施に踏み込んだのだ。だが、彼らの知識には〈秘密〉があり、彼らの思い込みがあった。

「理解深い知性」はそこをついて、かれらを思い込みから解放する。

手術が依拠した理論の欠陥によりチャーリーの知能は低下する。集団とは異なる高い知能を持ったチャーリーの悲劇は、彼の知能の基盤となる身体が、その集団が生み出した知識に依存していたことだ。

4. 終わりに

以上、テレパスの七瀬が入り込んだ家族、天才になったチャーリーが戻ってきた社会のコミュニケーションはどうなるのかを確認してきた。では初めの問いに戻ろう。「理解深い

知性」や「ゆたかな感受性」のある「完全なコミュニケーション」は何をもたらすのか。

七瀬もチャーリーも集団の成員が安住しているコミュニケーションを乱し、激しく動揺させていた。それは、家族たちが発狂したり、自殺したりするほど強烈な動揺である。

しかし、この動揺をもたらすことによって、「完全なコミュニケーション」は、人々を思い込みから自由にする可能性を秘めている。たしかに、チャーリーが教授らを思い込みから解放したことは、SF小説の中で描かれたエピソードにすぎないかもしれない。しかし、冒頭に紹介したエピソードはどうだろう。菅のエピソードから鶴見は、菅が一切のディスコミュニケーションを排除した「完全なコミュニケーション」の可能性を信じ、ディスコミュニケーションに対して無防備であったため、質問者たちとのディスコミュニケーションに傷つけられ、絶望する結果となったのだと指摘していた。この指摘は、鶴見が「ゆたかな感受性」によって菅の「秘密」を読み、「理解深い知性」によって菅にとっての〈秘密〉を明示することで、彼の知識を異なる地平にひきだし、丸裸にしてしまったからこそできたことだ。そして、この論考を読んだ「完全なコミュニケーション」の存在を信じている人々（少なくともそのうちの何人か）を、その思い込みから解放したはずだ。

また、井上が『シズコさん』に書かれた認知症の母と娘のコミュニケーションを「深いコミュニケーション」として指摘することができたのも、彼が「ゆたかな感受性」により彼女らの内面の「秘密」を理解し、「理解深い知性」により2人の間に起こった出来事を鶴見の開いた地平に接続できたからではないか。そして、鶴見と同様、「完全なコミュニケーション」信望者をその思い込みから解放したに違いない。つまり、理解とは違う方向へコミュニケーションを引っ張っていかうとしている彼ら自身が、本稿の提起した理解を駆使しているのである。

従来のコミュニケーションを巡る議論では、理解が人々に「危機」をもたらし、思い込みから自由にするという側面をあまり述べてこなかったように思う。もちろん、人々が理解というコミュニケーションの一側面に魅せられている状況下では、「完全なコミュニケーション」の神話性を暴き、それとは異なるコミュニケーションの豊かさを開いていくという方向性は妥当である。しかし、鶴見が批判した理解は、共有と和解をもたらすものと想定されている。もし、菅を責め立てた議員たちが、彼を理解していれば、議員は菅の伝えたいことを共有し、実際は決裂した両者に和解がもたらされると想定されている。しかし、本稿で言及した理解は、共有と破壊をもたらす。七瀬は「秘密」を含めた家族たちの心情を共有するが、その「秘密」を暴露することで家族たちが持つ思い込みを破壊し、家族を破壊する。チャーリーも教授らをはじめとする周囲の人々が、かれら自身が理解している以上にかれらを理解してしまう。それはかれらにとっての〈秘密〉を含めた理解である。しかし、この理解は教授らの思い込みを破壊する。とはいえ、この破壊は、思い込みからの解放へと繋がる可能性を秘めている。

ただ、2つの小説は、理解が理解される者だけではなく、理解する者にも別種の危機をもたらすことも示唆している。「ゆたかな感受性」を持つ七瀬はどの家族にも長くどまることができない。それは、家族たちの「秘密」を知ることによって七瀬自身が耐えられなくなってしまうからだ。一方の「理解深い知性」を持つチャーリーも、働いていたパン屋はクビになり、新しくできた恋人ともうまくいかなくなり、国際会議からも逃走してしまう。かれらは思い込みを共有する人々の中に安住することができないのである。

最後に、このような理解は私たちの社会に何をもたらすのか考えておきたい。理解は人々を思い込みから解放していくと述べた。しかし、冒頭であげたような「完全なコミュニケーション」の存在さえ信じられなくなっている人々が作る社会にとって、思い込みからの解放はもはや招かれざる客なのではないか。集団で共有された思い込み自体が劣化している状況においては、思い込みからの解放よりも、思い込み自体が求められてしまうのではないか。だが、だからこそ、私たちの社会においても理解は一定の意義を持つように思う。例えば、「完全なコミュニケーション」は存在するという思い込みが劣化すると、筆者のように理解し理解されることから完全に降りようとする人がいるだろう。一方で、上記のとおり「完全なコミュニケーション」という思い込みにますますしがみついてしまう人もいるはずだ。しかし、いずれの態度も何らかの「秘密」や〈秘密〉が隠された、ある思い込みに拘束された態度なのではないだろうか。完全さへの希求や、世界は不完全であることに対する盲目が隠れているのではないか。このように「秘密」や〈秘密〉を少しずつ明らかにしていくことで、私たちは思い込みが劣化したことによって発生する新たな思い込みから解放され、新たな地平を開いていくことができるように思う。

物語の最後、知能が低下したチャーリーは次のように言う。「いろんなことをしることやりこうになることはいいことです世界じうのことを全ぶしりたいとおもう。いますぐまたりこーになりたいな」(Keyes 1966=1989: 318)。筆者も理解というコミュニケーションから降りることなく、もう少し付き合ってみよう。

参考文献

- 井上俊, 2009, 「対話というコミュニケーション」長谷正人・奥村隆編『コミュニケーションの社会学』有斐閣, 89-108.
- Keyes, Daniel, 1966, *Flowers for Algernon*, Mariner Books. (=1989, 小尾美佐訳『アルジャーノンに花束を』早川書房.)
- Schurz, Alfred, 1964, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, edited and introduced by Arvid Brodersen (Phaenomenologia 15), Martinus Nijhoff, The Hague, 300p.+ XV (=1991, 渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』マルジュ社.)
- Simmler, Georg, 1908, *SOZIOLOGIE. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot, Berlin. (=1996, 居安正訳『社会学(上巻)』白水社.)
- 筒井康隆, 1972, 『家族八景』新潮社.
- 鶴見俊輔, [1952] 1991, 「二人の哲学者——デューイの場合と菅季治の場合」『鶴見俊輔集2 先行者たち』筑摩書房, 274-87.